落花生の花

マイペンライエリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
落花生の花

【Ｎコード】
Ｎ１４９７Ｍ

【作者名】
マイペンライエリー

【あらすじ】
私と陽介はいとこ同士。
どちらからとも無く惹かれ合って愛し合う様になる。
しかし私と陽介には自分たちも知らない秘密があった？？？
別れは誰にでもやってくるが　こんなに早く訪れるとは？？？

他サイトと重複掲載を行なっています。

車の中にはハードロックが大音響で流れていた。

白樺の林道をスピードをあげて走り抜ける私、１９歳。まだ若葉マーク付き。

大学の夏休みに帰省したついでに高校の同窓会に向かう途中だ。

卒業してまだ1年半しか経ってないけど随分久しぶりな気がするのは、地元から離れていたからだろう。

あの陽介も来るっていうし楽しみにしている。

陽介はイケメンでバスケ部のキャプテンで、優しくて女子にモテモテだったんだよなぁ。

だけど私は知っている。　陽介は実は泣き虫で小学校４年までおねしょをしてた事を。

陽介のお母さんと私の母は姉妹。だから私と陽介はいとこ同士なんだ。

小さい頃はよく遊んだなぁ。

泊まりに行ったり来たりしてたからお互いの弱点もよーく知っている。

大学生になってそれぞれ違う道に進んだけど　心のどこかでいつも陽介の笑顔を懐かしんでいた。

居酒屋の小上がりに案内されて　中に入ると、この前まで一緒に机を並べてた級友たちの笑顔が一斉にこっちを向いた。

笑顔を返しながらぐるっと目で陽介を探したが、まだ到着してないようだ。

「遅れてごめーん。」

車で来たからお酒は飲めないと言ってるのに、代行を頼めばいいからとか言われて断れない性分の私はもう既に酔っちゃった。

会の半ばくらいになってやっと陽介が登場した。少し日焼けしたせいか高校生の頃よりも少し締まってカッコよくなった。髪も伸ばしてるからもっと感じが変わって見える。

女子達は陽介をきらきらした瞳で見ている。

懐かし話をひとしきり終え、あの頃誰が誰を好きだったかというお決まりの話になり皆で盛り上がって来た時、私の携帯が鳴った。

見ると陽介からだった。あれっ、いつの間にいなくなってたんだろう。

「ちょっと外にでておいでよ。流れ星がきれいだよ。」

私はトイレに行くふりをして外に出た。

街と反対側の空には星がいっぱい瞬いていた。

店の前で空を見上げながら陽介は私を待っていた。私に気が付くとやあ！と片手を挙げて微笑んだ。

だが目は笑っていない。なんだか陽介は思い詰めた様子だった。

「今日はね、ペルセウス流星群がきれいに見える日なんだ。」陽介は私を店の横に導きながら言った。

私は流れ星を探して星空を見上げた。暫くの沈黙の後　突然後ろから肩を抱かれた。

「ケイ、逢いたかったよ。お前を忘れた事はなかった。」

陽介の声は心なしか震えているように感じた。

私も陽介の事は嫌いじゃなかったけど、恋愛の対象としては見てなかったからびっくりして思わず陽介を突き飛ばしていた。

陽介は照れた様に　「ったく、ケイにはホント冗談通じないんだからな。」と言って大げさによろけて見せた。

「もうっ、陽介ったら止めてよね。びっくりするじゃないの。」

私はこの場が気まずくてしょうがなかった。

『なんで、いきなりこんな事言うんだろう。陽介、私たちいとこ同士なんだよ。』

笑いながら店に戻ろうとする陽介の背中が寂しそうで　口に出して言えなかったけど。

同窓会が終わって私は実家で毎日毎日呆けていた。

それは暑さばかりじゃなく　陽介のせいもあった。

私の耳にくすぐるような陽介の声がまだ張り付いていた。

私は陽介の事を意識するようになっていた。

お盆に親戚中が集まっても　陽介は自分から私の方に近寄っては来なかったし、私もあんな事をしてしまったから話しかける勇気がなかった。お互い遠くから見ているだけだった。

そのうちバイトが忙しくなったり　卒業制作等で学校に缶詰になったりしてだんだん実家に帰る事も少なくなり　陽介とは逢う機会がなくなった。

それから5年の月日が過ぎ、私は広告代理店に就職している。

昨日突然母からメールが来て、叔母が危篤だと言う知らせを受け私は急遽実家へ帰った。

昔から病弱な叔母は入退院を繰り返していたが、今回はかなり症状が悪化して今日明日が峠だと医者に言われていた。

叔母はいつまでも少女の様な人で本を読むのが大好きで、レースのカーテン越しに庭を眺めるのも大好きだった。私を陽介と同じ様にとても可愛がってくれて、膝の上で本を読んでもらったり、クッキーを焼いてもらったりした。

叔母が入院中は　陽介は家に連れて来られ私も陽介も一人っ子だから二人は兄弟のようにして育ったのだった。

病室に入ると母と陽介が叔母の手を握っていた。

点滴の管の入った叔母の腕は　１５歳の女の子の様に細く、抜ける様に白かった。

翌日　叔母は苦しむ事無く皆に見守られて息を引き取った。
静かに涙を流す陽介の背中を撫でながら　かける言葉も見つからず
私も静かに泣いた。

お葬式が終わり　久々に陽介と近況を話した。陽介は社会人になって責任感も増し、頼りがいがあってますます人を惹き付ける魅力のある男になっていて，私は一緒にいてひどくどぎまぎした。
陽介は大手の電力会社に勤めていた。
転勤があってこの春　私の勤務先の街に赴任してきていたらしい。
今度街をオリエンテーションしてあげるからと　私は陽介を励ます様に陽気に言った。

それから3ヶ月　私と陽介は仕事帰りにお酒を飲んで愚痴を聞いてもらったり、美味しいものを探すのが趣味な私に付き合わせて小旅行したりするようになった。
だんだんいとこというよりも恋人同士の様に変わっていった。

一緒にいても安心出来、自然体でいられ　どんな事でも許し合える
そんな間柄だった。
ただ、私はまだ陽介との間に一線を引いていた。
キスまでは許せてもそれ以上はどうしても出来なかった。

陽介は望んでいたけど。

会う度に　私と陽介は磁石が引き合う様にどんどん親密になってい
った。
私が考えている事、私が欲しがっている事、私が興味を持っている
事、私が食べたい物、みんな陽介は感じ取って合わせてくれた。い
や、合わせてくれるのではなく、彼も同時に欲しているのだった。
私も陽介も付き合っている上で何のストレスも無かったばかりか、
ほかの人では補えない何かを感じていた。
お互いにもう離れられない関係になるのは時間の問題だった。

ある蒸し暑い夜、居酒屋で前後不覚になるまで飲んだ私は、陽介の
部屋で介抱されていた。
「よ~すけ~、あんたはほんっとに草食系だよね~。　こんな私見
ても襲ってこないんだ~。」

グルグルまわる天井を見ながら私は陽介を挑発していた。

「俺は襲いたいけど、やっぱりお前の気持ちを大切にしたいんだ。こんな状態ではフェアじゃない。」

『体育会系みたいな事言ってるけど、やっぱりあんたは草食系だ〜、チャンスなのに〜』

むにゃむにゃ悪態をつきながら私は深い眠りに落ちてった。

夜中に喉が渇いて目が覚めた私は　隣にある陽介の寝顔に気が付いてしばらく見ていた。

長い睫毛　きちんとお手入れした眉　形のいい唇　鼻筋も通っていて本当にいい男だった。

目と口は私に似てるかも。

その時陽介が目を覚まして私をじっと見つめた。

その夜　どちらから求めるという事なく　私たちは自然に結ばれたのだった。

私と陽介はもうお互の体の欠損部分を補う様になくてはならない関係になっていった。

私の机の上には　二人で旅行した時の写真が所狭しと並べられている。

どれも楽しい想い出の写真だ。

二人は心から笑っていた。あんな事が起こるなんて誰が想像出来ただろう。

あの日が来る迄は。

会社の昼休み　携帯の着信音が母からの電話と知らせていた。

「ケイ、お母さんねこれからそっちへ向かうから。美味しいさくらんぼが採れたから持ってくね。勝手に部屋に入ってるよ。」

『うわぁ、部屋の掃除　暫くしてないんだった。』

「汚いかも、お掃除お願いね。」

「また？　もうっ、お母さんお掃除に来たんじゃないんだからねっ。」

そう言いつつも母の声は笑っていた。

仕事が終わり私は陽介に今日は会えない事、母が来てる事をメールで知らせてから電車に乗った。

母に陽介と付き合っている事を話すのは照れくさいな、と思いながらも頬は緩んでいた。

マンションのドアを開けると私の好きな炊き込みご飯のいい匂いが迎えてくれた。

「ただいまぁ。」

私は高校生みたいに大きな声で　ハイヒールを脱ぐのももどかしく居間に入って行った。

母は後ろ姿で私を迎えてくれた。

母は私と陽介の写真を手にして机の前に座り込んでいた。

「あんたと陽介ちゃんはまさか　付き合ってるんじゃないでしょ？」

その言い方に冷たい咎めの響きがあるのを私は聞き逃さなかった。

「それ、どういう意味？　陽介と付き合っちゃいけないの？」

母は急に黙り込んだ。

母のこめかみが大きく波打っていた。

私は事の重大さを予感してそれ以上母に聞くことは出来なかった。
耳を塞ぎたかったがもう一人の私は母からの答えを待っていた。

「あんた達は兄弟なんだよ。二卵性の双子だったんだよ。」

私の耳はショートを起こしたみたいに　キーンとなったまま何も聞こえなくなった。

『陽介と私は二卵性の双子の兄妹！！　なんで？、どうして？？』

私の知らない所で私の運命を刻む時計を操る人がいて　その時計が音を出して捻れ壊れていく。

目は見開かれたまま瞬きも出来ない。喉は乾きすぎて声も出ない。つばを呑み込もうとしてごくりと大きな音を立てた。

「どうしてこんな事になったのかねぇ。。。」

母は事実を告白すると自責の念にかられて突っ伏して泣き出した。

母に激しく泣かれ　私は泣く機会を逸してしまった。

母は驚愕の事実をぽつりぽつりと話し出した。

私と陽介は叔母の子だった。

叔母は若い頃入院中にインターンの若い医師と知り合い恋に落ちた。しかし医師には親が決めた婚約者がいることが判り叔母は泣く泣く身を引き医師と別れた。
その時にはお腹に小さな命が宿っている事を知らなかった。

その後叔母は妊娠している事を知ったが　家族にも医師にもその事実を告げなかった。叔母は自分で育てようとしたらしい。

しかし妊娠６ヶ月に切迫早産になって入院し、お腹の子どもがはじめて双子と言う事が判明。同時に両親にも事実が曝されてしまった。

病弱な叔母の妊娠継続を心配した両親はひどく悩み医師にも知らせようとしたが、医師の今の幸せを壊したくない、という叔母の強い希望と　自分の生きてる証として子どもを生みたいという涙ながらの懇願に負けて事実を伏せたまま出産する事になったのであった。

その妊娠中、叔母は生涯で一番幸せそうだったと、母は言った。

難産で苦しんだものの私と陽介を無事に出産した叔母だったが　持病が悪化し、双子は到底育てられないだろうと誰もが思った。

しかし子どもを二人共取り上げてしまうのは忍びなく、また生きる希望を無くしてしまう事を危惧して陽介を残し　私は子どもに恵まれなかった今の母に引き取られたのだという。

血を分けた兄妹。どうしてもっと早く事実を教えてくれなかったのか。

私は母を恨み、叔母を憎んだ。

陽介と私がこれほど惹かれ合ったのは同じ肉体を共有した血縁のせいだったのか。

引き裂かれた運命は　捻れたロープが絡み合う様にお互いを呼び寄せてしまった。

母は陽介と二度と会ってはいけない事を何度も繰り返して帰って行った。

私はもう引き返す事は出来ない状況の自分を呪っていた。

私は陽介を心から愛していた。男と女として。

陽介もきっと同じ想いであろう。私にははっきり解る。

陽介に事実を告げる事は私には出来ない。

部屋の中は漆黒の闇に包まれ　ぬめる様な湿気の中で私は膝を抱えて声を出さずに泣いていた。

電話とメールの着信履歴はもうすでに２０件を越えている。全て陽

介からのものだった。
あれから私はメールで別れようと送信したきり　陽介と連絡を取るのを止めている。陽介は心配していた。私のマンションへも何度か足を運んでいたようだったが、私は友達のマンションに転がり込み陽介との接触を避けていた。
時々自宅マンションに必要な物を取りに行くとドアに必ず陽介からのメモが挟んであった。
？？？ケイ、僕には何が何だか解らないよ。突然別れ話をされても納得出来ないんだ。話し合う余地はないのか？？？？
『ダメだよ、陽介、会ったら私の決心がぐらついちゃうもの？　？？』
懐かしい陽介の手書きの文字がみるみる滲んでゆく。
兄妹という理不尽な事実を受け入れるのにはまだまだ気が遠くなる程の時間がかかるだろうし、もしかしたら一生受け入れられないかも知れない。けれども何も思い当たる事がなく、まだ事情を知らされていない陽介はもっと苦しんでいる事だろう。
陽介の不憫さを思って私は泣いた。

悩みながら私は手紙を書いた。

陽介

逢いたい気持ちを必死に抑えてこの手紙を書いてます。
先日母が来たのを憶えてますか。
その時母からとんでもない事実を知らされました。
私はその事実をまだ受け入れられず苦しんでいます。

あぁ，陽介。。。
回りくどい言い方をしても何の助けにもならないので単刀直入に書きます。

私と陽介は兄妹だったのです。しかも双子の。
だからあんなに求め合い安心出来る存在だったのでしょうか。。。

運命の神様は至上の喜びを与え同時に全てを奪ってしまった。

こんな酷な話ってあるでしょうか。
私は叔母（母）を憎みました。
母を恨みました。

どうしてもっと早くに事実を白日の下に曝さなかったのでしょう。

私たちがこうなるのをまるで待っていたかの様に今頃知らせるなんて運命に弄ばれてるんでしょうか。

いいえもう何も言いません。

陽介と愛し合った日々はもう消せないのです。
その想い出だけを大切にして私はこれから生きて行きます。
陽介、本当に愛してました。
この気持ちは永遠に変わりません。
陽介も私の事を愛してくれている事は充分わかっています。
それだけで私は幸せです。

もう陽介には会う事はないでしょう。
元気で暮らしてね。

ありがとう陽介、そしてさようなら愛しい人。

ケイ

この手紙が陽介の元に届く頃、私はもう別の街へ行ってるだろう。

私は今　小鳥のさえずりの聞こえる街に住んでいる。

あれから3年たって　脆いガラスの破片が刺さった私の心もやっと血を噴き出すのを止めた。

陽介とは連絡が途絶えたままになっている。

私の膝を枕にして女の子がすやすや眠っている。この子といる時だけが私の至福の時間だ。

人が何と言おうとこの子は私が守る。どんな誹謗中傷があったとしても。

実家の母とは年に1度位はハガキで連絡をしている。住所も明かさずに。

きっと消印だけで憶測しているのだろう、私がどこに住んでいるのかと。

ある日唯一住まいを知らせている友達から連絡が来た。実家の母が倒れたと。

私は躊躇したが　心を決めて母が入院している病院に娘の手を引い

て向かった。

ナースステーションで名前をいうと怪訝な顔をされた。

母は入院していなかった。

なぜこんな?を母はついたのか。私は腑に落ちないまま病院を出ようとした時、エレベーターから降りて来た母とばったり会った。

母は泣きそうな笑い顔をして私をしっかり抱きしめた。
そして娘を驚いた目で見てから　何も言わずに娘も抱きしめた。

「良く来てくれたね、会わせたい人がいるの。早くこっちに来て。」

私は　小走りに走る母に手を引かれて、ある病室の前に来た。
何だか私は懐かしさと同時に　全身の毛が立つ程の恐怖を感じていた。

母がドアを開けるとそこには陽介が血の気の無い顔で眠っていた。
陽介のあの体育会系の鍛え抜いた体の厚みも、溌剌とした皮膚のはりも無くなっていた。
そこには少年の様に線の細い陽介がいた。

いつか、お見舞いに来た時の叔母の姿と良く似ていた。

立ちすくんでいる私は母に背中を押され病室に足を踏み入れた。娘は怯えて私の足にしがみついていた。

ベッドサイドにひざまづくと陽介が弱々しく目を開けた。
私を認めると　陽介の瞳が一瞬輝いて見えたがすぐに目を閉じた。
閉じた両の目から涙がひとしずく流れた。
娘は　何を思ったのか　駆け寄って来て陽介の涙を小さな人差し指で拭ってあげた。

誰が教えた訳ではなく初めて会っても父親だと解る勘の良さは間違いなく私たちの子だった。
陽介は目を開けて震える細い手を伸ばし娘の頬に触れた。

私は　「あなたの子です。名前は風花。あなたに、陽介に。。。そっくりでしょ。。」と震える声で言った。
「風花。。。いい　な　ま　え　だ　ね。。」陽介は優しく笑った。
「なんで?、なんで、こうなの?やっと会えたのに、陽介、どうしたのよ~?元気で暮らしてって、私言ったでしょ。。。離れてても

元気でいてくれたら　私は陽介の事想っていられたのに〜。。。」

涙が後から後から流れ落ち私は冷静さを欠いて叫んでいた。

陽介は私の大好きだった滑らかな長い指で私の髪を撫で　「ご　め　ん　ね、ケ　イ、ご　め　ん。。。」と言った。

「私こそごめんね、急に姿を消して。今また会えて本当に良かった，陽介、ごめんなさい。ずっと会いたかった。。。」

私と風花は陽介を抱きしめお互いの温もりを感じ合い　幸せとこれからすぐに訪れるであろう別れの為に涙を流した。

日が暮れるのと同じ頃　皆に見守られて陽介は微笑みながら息を引き取った。。。。

陽介は叔母と同じ病気だった。

成人T細胞白血病リンパ腫。

キャリアだった叔母（生母）からの初乳で陽介は感染していたのだという。

私は生まれてすぐ初乳も与えられないまま　母に引き取られたので感染していなかったらしい。

キャリアになっても数%しか発症しないらしいけれども陽介も叔母（生母）もその数%のうちに入ってしまった事は残念でたまらない。しかし今思うとそれも運命だったのかも知れないと自分を納得させている。

そして陽介の最後の日に私と風花を呼んで陽介に会わせてくれた母に感謝している。

私は実家に戻り母と風花と３人　穏やかで幸せな毎日を過ごしている。

夏になると　風花は陽介とそっくりな目で私と一緒にペルセウス流星群を眺めるのだ。

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1497m/

落花生の花

2011年10月7日10時41分発行